文化財だより

第 17 号

平成16年3月

発行　真鶴町教育委員会

真鶴の文化・文化財は
大地に根を張った野の草
悠久の昔から緑に覆われ
風韻と潮騒のハーモニー
天地風水火に畏敬の念を懐き
宇宙・自然に神を求め
太陽・山石・水源を信仰し
生活を礎いた先人たち

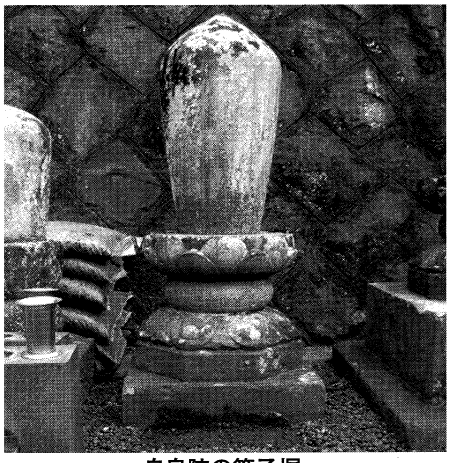
幕末・明治期
農業・水産・石材に
生活の活路を求め

真鶴の家群に灯をともす
文化・教養の寺子屋を創設
先覚者の足跡を尋ねる

窓辺から眺める
歴史・文化・文化財の眠る
点景の数々、背戸の路地
散策し、ほっと昔に返る
子どもたちの喜々とした声
笑いながら通り過ぎる
話したい、語りたい
真鶴のあれこれ

郷土の寺子屋

湯本　満



自泉院の筆子塚

寺子屋の起こり

「寺子屋」は江戸時代に普及した私塾―庶民の教育機関で、師匠が私宅に開設し、そこで読み書きソロバンを教えたところですが、仏教や儒教の教義、芸能や職能技術、教養としての和漢典籍の教授などは、奈良・平安時代から行なわれていました。しかしそれらは、寺門・宗家・学林および貴族・武家などの限られた上層階級だけに見られ、庶民とは無縁なものでした。

しかし庶民社会でも、家庭・職域・地域それぞれの中での教育はなされていたわけです。それが江戸時代になり、個人の志望に応じた一般教育が普及しはじめ、庶民層の子弟が集まるようになります。これが寺子屋の起こりです。

そうした風潮は、いろいろな社会の情勢や仕組みによってつくられるもので、ひとくちでは言えませんが、身近な要因としては、商品経済の台頭にともない、郷村の商人や職人にとり、商いの記帳・記録などに読み

目次

郷土の寺子屋 …… 1
文化財審議委員長　湯本　満
県内研修視察報告
驚き　驚き　意外な発見 …… 3
文化財審議委員　小野間　松男
真鶴のみかん栽培の歴史 …… 4
文化財審議委員　川口　仁齊
平成十五年度文化財保護事業 …… 5
風景の中に見る真鶴の歴史 …… 6
文化財審議委員　櫻井　武
子供の目を育てたい …… 7
文化財審議委員　川ノ邉　昭治

書きソロバンの能力が欠かせないものになり、学問というよりは庶民の渡世技量の養成といった必要目的から、寺子屋教育が起こり普及するようになったということでしょう。

足柄地方の寺子屋

この地方の私塾・寺子屋がいつごろから開設されるようになったか。資料によれば、足柄地方（小田原城下と足柄上・下郡）では小田原の宝永年間（一七〇四～）にはじまり、明治初期までの間に八二（小田原）八五（上）二二（下）の寺子屋数が見られ、県域全体としては東部ほど数多く、西部に来るにしたがって少なくなっています。

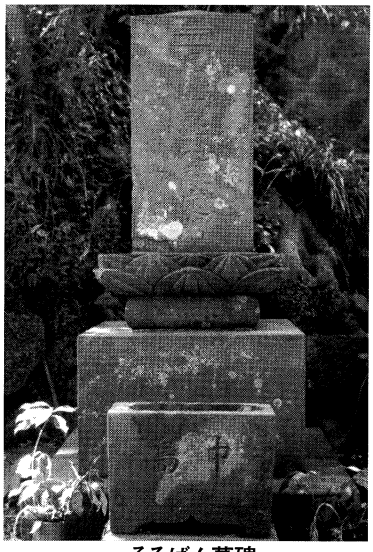
寺子屋師匠の身分は初期はほとんどが僧侶で、城下では武士・神官・町医者なども見られます。時代が下ると、町人や富裕農民で江戸遊学その他によって身につけた素養をもとに寺子屋を開業する者もあらわれますが、少村ではやはり寺に限られ、寺子屋の名称もそこから生まれたものです。

寺子屋には何歳ぐらいの子が通ったのでしょうか。地域差を無視すればだいたい七歳から十四、五歳まで、在学期間は四、五年で、門弟数が時代につれて増加するのは当然です。寺子屋では入学年齢や在学期間にはっきりした決まりはなかったようで、四歳で入門、在学八年という例も見られますが、おおむね六～九歳時の入門、四～六年の在学期間の者が多かったと言えます。

真鶴地域の寺子屋

高田稔氏（開成町）の調査によれば、県下で文献・遺物から確認される寺子屋数は五百五十か所ほどで、そのうち開設記録の初出は横浜市域の延宝七年（一六七九）、これに次いで享保年間（一七一六～）が五か所、その一つが瀧門寺だそうです。とすれば岩村瀧門寺の寺子屋は、足柄地方最古ということになります。

瀧門寺由来書に「当山十二世満立功外・・享保中結制・・法徒四人・・筆硯之若干人」といった記述があり、享保年間に法弟子と筆子若干名が学んでいたことが知れます。また弘化年間（一八四四～）に岩村の住人中島花山が、天保年間（一八三〇～）に岩村長昌院の禅宝和尚が、元治年間（一八六四～）に同村如来寺の春山和尚が手習いを教えました。


そろばん墓碑

真鶴村では文政年間（一七八九～）自泉院で手習い師匠にたずさわっていた大了和尚の筆子塚があります。その前面に「当山一八世大了素戒大和尚禅師」裏面に「文政三辰年八月□　日示寂」台石に「施主毫子（筆子）惣仲間」と刻まれています。（写真1）

明治六年（一八七九）岩真鶴連合の小学「立成舎」が常泉寺に設置され、村内四か寺の僧職が輪番で教導にあたったことが真鶴小学校誌に記され、寺子屋から小学校制度への移り変わりがわかりますが、開校時の生徒八人は、旧来の寺子屋とくらべても、意外の少なさです。

このように、地域の寺子屋師匠が僧職者なのは、彼らが地域最高の識者だったからにほかなりませんが、一人例外は中島花山で、注目すべき人物です。そこでこれから彼について、推測をまじえながら記してみることにします。

工人師匠中島花山

中島花山はどのような身分の人か、先年伺った瀧門寺先住の話では、岩村中島家の係累で、石工だったのではないかということでした。

工人階層の寺子屋師匠というのは、おそらく他地域には見られない珍しい例でしょうが、これには江戸時代岩村の村況に密接な関わりをもつ理由があると思われます。

西相模地方で瀧門寺の寺子屋開設期が格段に早いのは、一般の子女教育というよりも、江戸時代石工業の確立にともない、村の働き手の多くが石工業に専念しなければならなかった岩村では、石場の測量、石材の計量などの計算技能が、石工個々人に必要視されたからです。

花山は石工階層の中でも傑出した技能の持ち主であり、筆子たちの崇敬を集めた人柄であったことは、瀧門寺の墓碑にもうかがえ、それには

花山の辞世と門人の献歌

辞世　　花山

なき後えおしえのこさん十呂盤の
みがける玉の光るきとくを

門人

真実におしえたまえる算術を
いくと世かけて恩はわすれじ

が刻まれています。(写真2)

これから、花山が平民（工人）身分ながら、辞世歌を詠むほどの素養の持ち主であったこと、そして彼に対する門人たちの敬慕の情の深さが偲ばれると同時に、花山が読み書きばかりでなく、算盤のレベルを超えた算学（和算）師匠であり、寺とは別の独立した私塾経営者であったことも推察できます。

自泉院と瀧門寺の筆子塚は、地域寺子屋教育を物語る貴重な石造文化財と、かねがね私は思っていました。今後精査の上、ぜひ町指定を実現させたいものです。

「・・・刻下諸物價（価）暴騰セシニモ不拘期ヲ不違精良ノ・・・・（略）・・・・貴下ノ効尤モ多ナリトス・・・・（略）・・・・」

土屋大次郎氏が何時、どの様な石材をどう搬送し、その成果はどうだったのか。そんなことを思い浮かべながら「文化財審議委員会」へ浦賀船渠の視察を提案し、十一月十四日に「県内文化財視察研修」の実現をみました。

横須賀市教育委員会の佐藤さんと住友重機械工業㈱横須賀製造所総務課長の斉田さんのご案内で、真鶴を中心として運ばれた安山岩系の石積み、ＡＢＣ岸壁約五〇〇メートル余りの間知石積みを見学してまいりました。

『この岸壁は、安山岩小松石系の石で、昭和初期に造られたものです。』の説明を、ちょっと不思議に思いながらも、見渡す限りの岸壁の長さや多量の石材に驚かされ、壮大な石積みを心もそぞろに見て廻りました。

『それでは明治末期に造られました、レンガ積みの一号ドックを見て頂きます』と車で案内され、奇麗に整理され「ガラン」としたドック内に入って驚いた。ドックは船底を大きくした様に、階段状に積み上げた五層のフランス式レンガの最上段「てんば石」や階段は、すべて安山岩系の堅石で覆われていました。上ずった「小松だ」「小松だ」の声。だが由来が分からない。

後日、横須賀市教育委員会の佐藤氏より「浦賀船渠六十年史」に記載された土屋大次郎氏と石材調達の記事と創業当時の船渠築造の経緯のコピーを頂きました。

六十年史には、「一、明治三十年十二月相州産堅石と割栗石三万七千才余(注)才・切は一立方尺)を総額三万八千七百八十四円七十四銭　土屋大次郎氏と購入契約を行い、渠底敷石同上一万四千才余を六千十四円二十八銭九厘で購入し、三十一年十二月全部納入を見た。」と書かれています。

次に、真鶴町史資料編を見ますと近現代編第二章第三節に「土屋石店営業高調」があり、明治二十九年一月～十二月に至る営業高調(控)の中に一金(空欄)浦賀船渠青木売石代『朱書　是八三十年度廻シ(鉄道間知未納ト対照セバ相違ナシ』とあり、三十年の営業高調はなく不明です。

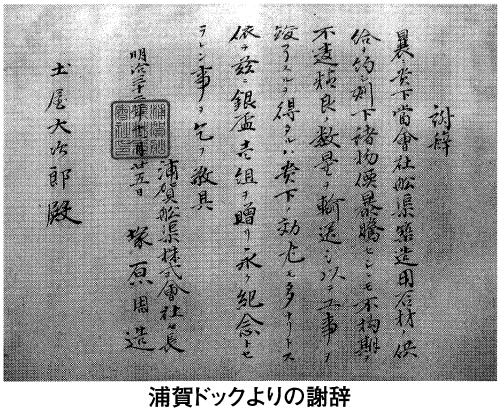
しかし、土屋家文書　未整理分の中に浦賀船渠との石材契約書の後半部と「浦賀船渠第壱号船渠築造用石材購買仕様書」を発見しました。

県内研修視察報告

驚き 驚き 意外な発見

小野間　松　男

浦賀レンガ積み1号ドック



謝辞

浦賀ドックよりの謝辞

契約期日は、明治三十年十二月二十四日となっており、仕様書には、

一相州六ヶ村ノ内堅石　壱萬千参百拾本

此切数　七萬千四百貳拾六切五分六厘

一イ印　岩岐石（直方体石）四百貳拾本

一割栗石　参百坪

右仕様別紙仕譯（しわけ）書に記載シタル寸法ニ據（よ）リ上等石材見本ノ通リ各山地ノ丁場ヨリ切出シ赤色并ニ磯石等ヲ除キ総テ角石ニ造リ出来ノ部分ヨリ漸次指定シタル朱書番号に基キ運送シ・・・・（後略）

明治三十年十二月と書かれています。

この仕様書から読み取れる内容を考えますと、石材採石は、相州六ヶ村で行なったこと、（根府川・江の浦・岩・真鶴・吉浜・門川）《町史資料4編1章3節⑯》の丁場から安山岩小松石系の堅石が採石されたこと。赤色（赤ぼさ系）と磯石は採用されず、良質な石材のみ納入されたことが分かります。

一万千三百十本の良石は、七万二千余切（一切は一立方尺）ですから一本平均六切の直方体石となります。さらに、イ印　岩岐石　四百二十本は、特注の石材で相州堅石でも石質が優れた物を指しますので、本小松系の堅石を指定され、直方体に仕上げ搬入されたものと考えられます。

土屋家の石材販売の実績から明治期の開港・造船・鉄道敷設の大事業を類推できることを垣間見ることができました。

真鶴のみかん栽培の歴史

川口仁齊

現代では広く一般に人々がよんでいる「みかん」は温州みかんをさしています。そして、みかんのルーツは柑橘類であるとされ、原生地はアジアの広い地域に渡るとされています。西暦二九七年に中国の陳寿が書いた魏志倭人伝によると「日本では橘（タチバナ）が自生しているが食用にされていない」との記述があるそうですから、日本にも元来自生していた橘があったようです。さらに、飛鳥時代（六〇七年）頃から始まった遣隋使、遣唐使による大陸との交流により伝えられた種などをもとにして、選別や交配が行われて栽培され続けてきたのでしょう。それらの中から一六〇〇年代後半、突然変異により枝が変わりが発生して、それにさらなる改良選別が加えられ現在の産業用の温州みかんとなったのでしょう。

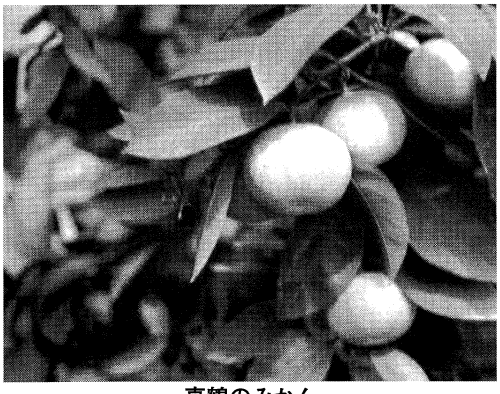
神奈川県のみかんの栽培は、安永年間（一七七二～八一）に足柄下郡前羽村（現小田原市）で紀州産の苗木が植えられたのがはじまりとされているが、曽我付近（同）で元禄年間（一六八八～一七〇四）の説もあるという。肥後の国八代郡高田村（現熊本県八代市）へ中国の浙江省から小みかんが伝えら栽培されていましたが、文政年間（一八一八～三〇）に小田原藩士が熊本から持ってきたという説がありますが、いずれも史料の裏付けはなく確実なものではありません。

真鶴では、発心寺に伝えられる当寺開山以下代々建立次第のうち九代信誉建立次第の中に、

八本　寛文九年ヨリ段々ニ蜜柑木接仕立申也

茶園　丸山畑
塔ノ入畑　蜜柑畑

の記述があるので寛文九年（一六六九）には蜜柑畑があり、蜜柑の木が栽培されていたことがわかります。


真鶴のみかん

さらに寛文十二年七月（一六七二）に書かれ真鶴村の村勢要覧である相州西郡西筋真鶴村書上帳には、

一、檸柑御年貢、毎年御検見次第ニ指上ヶ申候　但、年ニより御菓子檸柑被仰付出し申候

との記述があるので、当時蜜柑の検見が行われ蜜柑の木に年貢が課せられていたことが知られます。

小田原地方をはじめ足柄上・足柄下郡に現在のような産業用みかんが栽培され始めたのは、明治四十年代（一九〇八年）から大正のはじめ（一九一七年）頃でありますが、明治の終わり頃までは、神奈川県産のみかんに対する評価は低く、果形が小さくて

酸味が多く京浜地方に出荷されても果物扱いをされなかった。（富樫常治『神奈川県園芸発達史』一九四三年）

足柄下郡のみかん栽培の推移をみると、一八九七年（明治三十）に生産額四一万八〇二二貫・三万八〇二円であったのが、一九〇五年（明治三十八）には一三九万三四〇七貫・一六万四四九一円にまで成長をとげ、さらに翌一九〇六年（明治三十九）には生産高では、一一一万四七二六貫に減少したが価格は一七万二三七五円に増加した。一九〇六年の町村別の生産額をみると、第一位の早川村外四ヶ村組合が五七万九六六五貫・八万九五八五円で郡内の五割を越えている。真鶴村外二ヶ村組合は、五七二貫・八八三円で十一位におり、生産額・出荷額ともに〇・五％にすぎなかった（『横浜貿易新報』一九〇七年九月十日付）。

みかん畑から相模湾を望む

筆者の家もみかん栽培農家であり、祖母や父はみかん栽培に熱心であった。父の話によると大正時代まで、みかんは樽に入れて運搬や販売がなされたが、後になって石油箱（石油缶を入れる箱）やそれより小さい木箱（岩地区では通い箱といわれた）に変えられてきた。

鉄道が開通し陸路の運搬手段が整備されてくるまで出荷は船により行われていた。岩の海岸に大きな船がくると「船が着いたぞー」と触れてまわり、農家は樽に入れたみかんを出荷した。小船に積んで沖に待つ船まで運び、積み替えて運んだということです。

栽培当初には貯蔵の技術がなく、日光があまり当たらない場所の土手などに穴を掘って、その中に埋めて貯蔵したといいます。

栽培が盛んになり、その技術が進んだのは第二次世界大戦の後であり、昭和三十年代までは岩地区でも八十人以上の季節援農者、いわゆるみかんもぎの女衆（おんなし）といわれる人達が就労しました。

昭和四十年代に入ると全国的にみかんの収量が増加し、輸送手段の整備やスピードアップが進んで西物といわれる静岡・和歌山・愛媛産の品物が関東地区の市場に供給されました。あいまって販売時期が競合するみかん以外の果物（りんご、いちご）なども大量に市場に出回るようになり、西の品物と糖度の高さや酸の少なさ、また果皮の質のよさでは一段劣るこの地方のみかんは期待される高い値段では販売できなかった。京浜地区の市場でよい値段のつかないこの地方のみかんは、東北地方や北海道の市場の開拓がされ、販売は続けられてきた。

この間、農家も黙って過ごして来ただけではない。湯河原町吉浜の大津氏によって品種改良された大津四号や青島種の積極的な導入を図って果実の平均的糖度を十二度まで上げ、食味を良くする栽培方法が研究されてきました。

しかし、最近になると価格の低迷はより一層進みさらに耕作者の老齢化や後継者の不足に一段と拍車がかかり、みかん栽培の将来は必ずしも良いとは言えなくなりました。

今後は更なる品種改良と栽培技術の高度化、後継者の養成、労働の省力化、生産コストの低減化、輸送方法の見直し、販売市場の開拓等々たくさんの問題を解決していけば首都圏に近いという地の利を生かした都市近郊形農業として生き残れるでしょう。

みかんの起源や伝来の歴史さらに栽培規模、産出の推移などについては、昭和四十九年三月三十一日神奈川県柑橘農業協同組合連合会より発行された神奈川県柑橘史に詳しく記載されています。本稿も同書を参考にさせていただきました。

平成十五年度 文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業
・文化財だより第十七号発行
・町民センター、民俗資料館展示事業
各施設で年六回の企画展を実施

◎文化財審議委員調査研究事業
十一月十四日、横須賀市の住友重機械工業（株）浦賀船渠に小松石の使用状況確認のための調査研究を実施

◎文化財審議委員協力事業
教養講座「くすのきゼミ」に講師として協力十一月九日、伊勢原市方面に「但唱の史跡を訪ねて」を実施

風景の中に見る 真鶴の歴史

櫻井 武

岩、山の神社から

ある年の冬至の日のこと、私は岩、山の神社に立って日が沈むのを眺めていました。真鶴道路トンネル付近の山の上です。入り日は湯河原富士とも呼ばれる、岩戸山の頂上に吸い込まれるように落ちていきました。

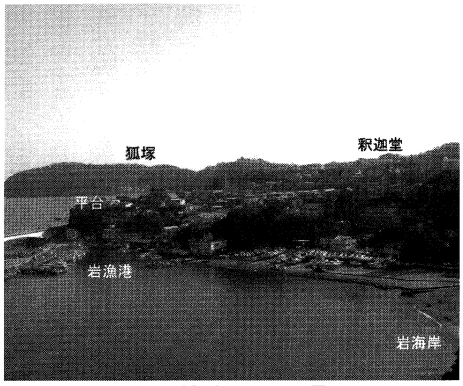
岩戸山はいわゆる神奈備型＝ピラミッド型に見える山で、日金山（十国峠）、伊豆山神社奥の院の嶺とともに「伊豆の御山」と呼ばれ、東北地方の恐山のように、この世とあの世を結ぶ境界として古くから信仰されてきた霊山です。日金山頂付近にある東光寺には石仏をサークル状に配した賽の河原が設けられています。

真鶴半島の三ツ石に渡ると、西側の二つの岩の真ん中にこの岩戸山を眺めることが出来ます。海上からは船の航行のための良い目印ともなります。

縄文幻視

縄文時代、ストーンサークルやウッドサークルと呼ばれる施設が作られました。それらの多くは墓所であったとともに、太陽の運行を測るための施設でもありました。ある地域で目印になる山に、冬至や夏至、あるいは春秋の彼岸に、日の出・日の入りが望める場所に作られたのです。冬至に日が出入りする場所は最南端に、夏至は最北端に、その中間が彼岸となります。

ある地域においてそれぞれの位置が分かれば、太陽の出入りの位置を見て、今が一年のどのあたりになるかということがわかります。花の開花など、年毎に変化する動植物に基づく判断より正確な暦が得られます。つまり、ストーンサークルなどは地域のカレンダー作りのための施設でもあったと考えられています。これは日本だけではなくヨーロッパにも見られ、イギリスやアイルランドにみごとなものがあります。もしかしたら岩の山の神社の地も、そんな場所だったのではないか？　古くからの聖地として縄文時代までさかのぼるのではないか？　そう考えると、黄金色に輝く入り日の中、この地にはじめて暮らしの場所を定めた、遠い、遠い祖先たちが、石や木の柱を立て、同じように冬至の入り日を眺めていた姿が目に浮かぶようでした。



山の神社からの風景

箱根火山の一部として

岩の山の神社からは眼下に、源頼朝が石橋山の合戦に敗れ再起を期して房総半島鋸山の海岸へ逃れる際、船出の浜と伝えられる岩海岸が、背後に真鶴半島が眺められます。また視線を北西にとれば、箱根南東部地域の境界点ともなる星ヶ山周辺へ至る尾根に、採石場がいくつも並ぶ風景を見渡すことができます。なお、貴船神社境内から正面に星ヶ山が眺められます。

半島も小松石の取れる尾根も、箱根火山が成長する過程で噴火した、たくさんの小さな火山の集まりです。地学では、早川から真鶴、吉浜・鍛冶谷付近までの地域を「単生火山群」と呼んでいます。この地域は溶岩や火山灰が厚く積もって出来た地形です。その厚さは箱根火山の下にある湯ヶ島層と呼ばれる地層まで、千メートルを越える厚さがあると考えられています。

真鶴に温泉が出ないのは、カルデラ形成や河川の浸食によって、火山の底が露出している湯河原西部千歳川流域や箱根早川流域などに対して、このような厚い堆積層が積もっているからです。その代わり、長く伸びた形で噴火した真鶴半島が、冬に北伊豆地方東部に吹き降りる、俗に貧乏風と呼ぶ厳しい季節風を遮り、良い漁場と港を作り出してくれました。また古くから良質の岩石が採取され、地域の経済を支えてきました。

縄文と古墳時代の遺跡

真鶴には港の西の山手になる釈迦堂や貴船神社周辺、半島先端の番場浦、岩平台周辺、新島、沢尻などに、縄文時代や古墳時代の遺跡がたくさん確認されています。最も古いものは約七千年以前にさかのぼる縄文時代早期中葉の土器が出土する釈迦堂遺跡や番場浦遺跡です。当時はまだ冷涼な気候で、周囲は現在の常緑の森とはまったく違った、紅葉の美しい落葉樹の森に包まれていたと考えられています。

時代は下って7世紀、大和朝廷を中

心に日本の国家が形作られる頃のことです。貴船神社の山の手尾根付近の狐塚と、岩漁港山の手平台付近に古墳群が作られました。それぞれ別な集団の長の家系の墓所と考えられます。つまりこの頃からすでに、真鶴と岩のふたつの地域が独立して存在していた可能性がうかがえます。

ところで古墳というものは、一般に稲作農業によって蓄えられた富を背景に作られたとされます。しかし真鶴には水田が作れるような場所はありません。ではいったい何によって、古墳を作ることができるような強固な集団とそれを支えた富が得られたのでしょうか？ まず考えられるのは漁獲物による交易です。史料は奈良時代の木簡や平安時代初期の延喜式まで下りますが、干鰹や魚醤油などが古くから伊豆の産物としてあげられています。また、相模風土記逸文、万葉集、日本書紀応神記などに見られる「足柄御船」（足軽い＝快速→足柄と、この地域の木材で作られた船は船足が速い快速船として知られ、足柄の地名の由来ともなっている）や「伊豆の御船」の存在。つまり、朝鮮半島南部をめぐって新羅と緊張関係にあった当時の大和朝廷に対し、足柄・伊豆地方から軍船や水兵の供給が行われ、それがなんらかの富をもたらせたのかもしれません。あるいはすでに石材も交易の対象品になっていた可能性もあります。隣の根府川の石は、すでに約四千年前の縄文時代後期に平塚へ住居の敷石として運ばれています（平塚市博物館に展示されています）。

文献や考古学的な遺物を元に推理してみましたが、みなさまはどんなことをお考えになるでしょう？ さて、話は尽きませんが紙面の制約があるためこのくらいにしておきましょう。

地形を利用して

火山によって作られた地形をうまく利用して、私たちの祖先はこの地で長く暮らしを営んできました。江戸時代には、主に岩の人々が石を採取し、真鶴の人々が船で運びました。石工祖先碑には「一頃の田無し、しかれども百有余戸飢渇を知らず」、つまり、「田を作ることのできないこの地で、たくさんの人が飢えずに暮すことができる。」それは、石材採掘を開発した祖先のおかげだと記されています。

岩の山の神社から眺める風景の中には、真鶴の歴史をひもとくたくさんの鍵を見つけることができます。

子供の目を育てたい

川ノ邉　昭治

私の幼少時四、五歳頃、「西ノ神（賽ノ神）」の祭りで大人が大勢集まり石の地蔵様に手を合わせている姿を不思議に思いながら、その後ろで子供たちも一緒に頭を下げたあと、山車を引いた記憶があります。

入学して友達もでき、遊び仲間と自泉院へ行き、「閻魔堂」の閻魔大王を見て、世の中にこんな大きな人間がいるのかと話していたら、方丈さんから、「悪い子や嘘をつく子は閻魔様に舌を抜かれてしまうんだよ。」と教わったことを覚えています。それが私の地域文化財に触れた最初だったでしょう。昭和の初め頃のことです。

その後、学年が進み校舎の二階から港や半島を見渡しながら、先生から出船入船で栄えた昔や「御料林」の話を聞きました。

土地言葉で「小江戸」と言われた時代、江戸との海運で周辺のどの地域よりも早く、江戸の文化や風俗をこの地にもたらした海の男たち。小田原藩総がかりで真鶴半島に植林し「お林」と呼ばれて以来、村人は立ち入りを禁じられたことなど、江戸時代の歴史や文化の話を、子供なりに知るようになりました。

今を去る八百年の昔、源頼朝という源氏の武将が平家の軍に追われ真鶴湊の洞窟「鵐の窟」にかくれて難をのがれたあと、岩の浜（頼朝船出の浜）から房州（千葉県）へ渡り、やがて平家を打ち滅ぼして鎌倉幕府を開いたことや、江戸時代の初め「風外」という偉い坊さんが真鶴に住んで、「風外堂」という天神堂を建て、得意の達磨絵を描いて評判になったことなど、町うちの誰からということなく聞きました。

その後、年月が経ち、小学校高学

関東大震災後の真鶴小学校

年になると、しだいに視野も広がり、いろいろと新しいことが分かってきました。

そこで私が郷土の史跡の第一にあげてもよいと思ったのが、岬先端の「砲台跡」でした。幕末の嘉永六年（一八五三）相模湾沖を通る外国船に備えて幕府が築いた砲台の跡で、そこに番兵の詰所（番場）があり、彼らが出入りする船着場になった入江が、今も「番場浦」という地名で残っています。

また、岬の高台は古くから「灯明山」という名で呼ばれていますが、これは今から三〇〇年程前に灯台が建てられた場所です。真鶴半島は相模湾で一番突き出ているので、海上を通過する船の目印になる灯台が建てられたのです。

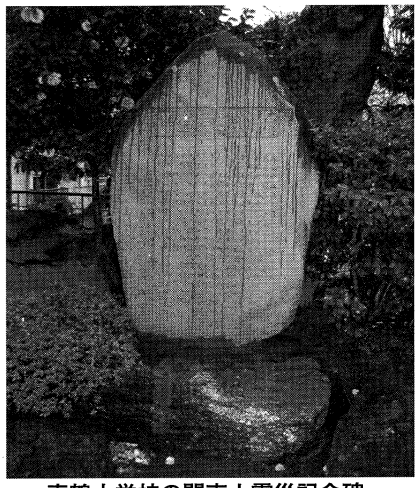
時は移り、昭和の戦争時代になり、学校は軍隊の駐屯宿舎とり、生徒はのんびり勉強するどころではなく、勤労奉仕で麦踏や草刈などいろいろな仕事に駆り出されるようになります。

やがて戦局が激化すると、私たち高学年生は毎日のように兵隊と一緒の行動を命令され、防空壕や陣地の構築材料に使う塹壕用抗木の運搬や、大平山の土木作業など少年の体にはこたえるような仕事が続きました。

昭和二十年の頃は、毎日のように空襲警報でした。大平山では兵隊が掩蔽壕から上空へ向けて機関銃を発射したので気づかれたのか、その後連日敵機の攻撃を受け、また学校には兵隊が駐屯していたのが知られたのか、こんどは学校も機銃攻撃を受けるしだいです。

後から、学校だけでなく石船、漁船まで攻撃され死傷者が出たと聞き、驚きました。

戦争が終わり、勉強もろくろく出来ずにきた学校生活にも平和な雰囲気が戻り、歴史も文化も新しい時代に入ります。今まで禁じられていた野球をはじめとして、先生・生徒が一緒になって運動も出来ました。そうしてまた、昔の話も聞かれるようになりました。


真鶴小学校の関東大震災記念碑

そんな中でも記憶にあるのが、大正の大地震の話です。なんで震災の話だったか、たぶん九月一日震災記念日の時ではなかったかと思います。

時は大正十二年九月一日、折から襲来した「大地震」で、尊い命を落とした先生と校舎の惨害の説明を受けたときに、誰が言い出したでもなく講堂裏（当時）へ行きました。これが「記念碑」というものに関心をもった最初だったと思います。こうして少しずつ昔の真鶴を知ることに興味をもつようになりました。

その当時、不思議に思っていたのが西念寺入口にある「黒田長政墓」で「蓮の台座」だけで墓石がなかったからです。それからは、私が学校で知った「震災記念碑」をはじめとして「築港記念碑」や「賽ノ神」などの石造物に興味をもつようになりました。

それから、友達と釈迦堂山の畑や空き地で「土器・鏃」などを見つけ、そこが縄文人という古代人の住んでいた遺跡であることを知りました。これは私だけでなく、子供達のはやり遊びの一つのようでしたが、戦後の考古学ブームのハシリだったかも知れません。

その後は、社会人となり真鶴郵便局に奉職して町内外を歩くうちに、先輩やお年寄りの力添えで、そこここの石造物や記念碑などに触れる機会が多くなり、成人として郷土の歴史・文化に親しむようになりました。

このように私は子供の時分から学校や近所の人、友達と遊びの中から、真鶴の昔の様子を少しずつ教わって覚え、今では日本三大船祭りの一つと言われ、国の重要無形民俗文化財にもなっている「貴船祭り」や、徳川氏の江戸築城以来全国に名の知れた「小松石」の産地、真鶴はそういった歴史や文化の詰まった土地だと思うようになりました。

自分の少年期を振り返って書きました。生涯教育が言われる現在ですが、年配者だけでなく幼い子供たちにも相応しいやり方で、郷土の自然や歴史・文化に接する機会を提供することも大切だと思います。